

発達に遅れを持つ子どもの幼稚園での適応過程に関する研究：保育者の意識変容が保育行動に与える影響の検討(平成18年度心理科学研究科修士学位論文要旨)

著者名(日)	縄井 翔子
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要：J Psychol Sci
巻	2
ページ	154
発行年	2006
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006823/

発達に遅れを持つ子どもの幼稚園での
適応過程に関する研究-保育者の意識変容
が保育行動に与える影響の検討-

縄井 翔子

〈目的〉

近年の発達支援において、インクルージョン・個別教育計画などの重要性が謳われ、統合保育を行う上で、保育者は、障害児の障害特徴を把握し、障害児が健常児と共に幼稚園生活に参加するための支援を行うことが必要であると考えられる。保育者が適切な保育を行うためには、保育者の児の捉え方や、保育行動が、子どもにどのような影響をもたらすかを把握することが重要である。しかし、障害児と他児や保育者の関係について、生活文脈に即して検討された研究は少ない。そこで、本研究では、行動観察と保育者へのインタビューを行い、保育者が子どもの見方の変化による保育行動の変化を子どもと保育者の関係に焦点を当て、関係論的視点から検討する。

〈方法〉

研究協力者は札幌市内の幼稚園に入園した発達障害児7名とそれぞれの対象児が通う幼稚園の担当保育者7名であった。保育者へのインタビューは5月と9月の2回行った。行動観察は入園直後から半年間月1回ずつ、自由保育場面での保育者の対象児や他児に対する働きかけを観察し、データとした。

〈結果〉

インタビューでは、入園当初、保育者自身は児を障害概念や子どもの印象で捉えていた。半年経過すると、一人の園児としてその子の特徴を捉えるようになった。また、児の集団参加が進む中で、保育目標が具体化し保育者の対応も焦点化されていった。児に対する接し方では直接的な働きかけから間接的な関わりへの変化を述べていた。尚、障害児担当経験の浅い保育者と経験の多い保育者で回答の偏りが見られた。行動観察では、保育者の働きかけは児、他児のどちらに対しても間接的

な働きかけが多く、時間経過と共に、児に対する働きかけより他児や両方に関与する働きかけに移行した。しかし、働きかけの内容は対象児により多様であった。

〈考察〉

保育者は、半年間の時間経過の中で、児に対する理解を深め、児の見方を「障害児」から「一人の園児」に個別化した。それに伴い保育行動も常に児を主体にした受け入れる保育から、幼稚園生活を基盤にした保育へ変化し、児への援助は、児に直接働きかける援助から他児を動かす環境調整を中心とした援助に変化した。これは、発達の最近接領域や足場づくりの考えで説明することが可能と考えられる。しかし、保育者の働きかけは児の障害種別、保育者の障害児担当経験、園の保育設定によって多様であり、園生活に障害児の参加を促すためには、児を個別にとらえ、児の状態を適切に見立て働きかけることが必要である。同時に、児の捉え方や働きかけ方略の背景には、保育者自身の背景に基づく児の捉え方や、園の環境が大きく影響を与えることが示唆された。そのため、保育の場におけるコンサルテーションを進めるにあたっては「対象児」「他児」「物的環境」「保育者」など各々に対する同時的な支援の実施と、個人の行動や対人関係の時間による変化を考慮した支援計画と支援の評価が重要と考えられる。

〈主な文献〉

- 鯨岡 峻・鯨岡和子(2001). 保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門 ミネルヴァ書房
長崎 勤(2003). 子どもの発達支援が、ここに関わる一障害をもった子どもたちへの支援可能性を中心に 発達, 94, 60-65.